

知行合一

学校教育目標

潤いと輝きにあふれる学校

芦北町立田浦中学校
学校だより 第21号
令和元年12月16日
文責 校長 畑口益喜

かささぎの 渡せる橋に おく霜の 白きをみれば 夜ぞふけにける
中納言家持 (百人一首6)



修学旅行に行ってきました！

10(火)から12(木)の3日間、森教頭を団長に、2年生30名が関西方面へ修学旅行に行ってきました。

【1日目】奈良県に到着して最初は聖徳太子縁の法隆寺を見学。移動して東大寺では金剛力士像・盧舎那仏坐像に圧倒され、奈良公園では人懐っこい鹿に囲われました。

【2日目】終日、京都市内班別自主行動で、金閣、清水寺等の名所旧跡を班ごとに計画を立てて見学をしました。実際に見る金閣の美しさに感動しました。清水寺恒例の「今年の漢字」の発表は明日12日。見たかったなあという声も聞こえました。悪戦苦闘の中で、自立に近づいた1日でした。

【3日目】人と防災未来センターで阪神淡路大震災の記録に学び、防災意識を高めました。帰りの新幹線、バスでは爆睡。楽しく学んだ3日間でした。



招福餅つき

14(土)、民生児童委員の皆様にご協力いただき、3年PTA行事



「招福餅つき」を行いました。3年生が一番招きたい「福」は高校合格。願いを込めて紅白の餅をつき、丸めた後に(合)の焼き印を押して各家庭に持ち帰りました。

また、今年も『頑張ればどぎゃんかなる』セット(先生たちの寄せ書き下敷きと合格黄金鉛筆)を贈りました。生徒・保護者・地域・職員が「ONE TEAM(ワンチーム)」で福を呼び込みます。

※福の印、鉛筆の両方とも五角形で『五角で合格』最後は駄洒落で勝負です。



【田浦の民話】 011202

先週の金曜日に田浦中学校区学校地域教育協議会の会合がありました。そこで委員の一人である倉永淳一さん（季刊「野坂の浦」の編集長）とお会いしました。田浦中の今年の文化祭で1年生が「ずいきのこうき」を劇にした話をしたところ、倉永さんたちが編集された「ななうらの民話・伝説（上・中・下巻）」にも載っていると、わざわざ学校まで持ってきていただきました。

せっかくの機会です。1年生が文化祭で発表した田浦の民話「ずいきのこうき」全文を紹介します。（H）



【ずいきのこうき】 011203・011204

田浦の古老たちが難問にぶち当たって困惑したとき、苦笑いしながら、「はい、はい、ずいきのこうきでございます。」と、とぼけた返答でお茶をにごす格好は、近頃めっきり少なくなったようだが、たまに出会うと懐かしい気分が湧いてくる。この「ずいきのこうき」については、ちょっと面白い物語がある。

ずっとむかし、田浦に百姓頭（がしら）の仁助という大変とんちに長けた男がいた。その評判が時の殿様の耳に入り、一ぺん会ってみようと、庄屋を通じてお召しの達しが来た。

ちょうど春のこと、服装を正した庄屋につれられて、仁助もどうやら整えたござっぱりした身なりで、御殿へまかり出た。

殿様は、中央玉座に、両側には家来たちがずらりときら星のごとく居並びの中に、遙か末座に平伏した庄屋と仁助。庄屋は緊張して小心翼翼、少し震えとるが、どうしたことか仁助はケロリとして平気の平左である。

型のごとく、殿様が「その方が、田浦の仁助か、遠路のところ大義であった。さあ近うまいれ。」

「はい、はい。」仁助は庄屋とともに進み出る。庄屋が冷や汗をかきながら小声で、「これ仁助、頭を低く下げて。」仁助は、畳のへりのところに手をついてぴったりおじぎをする。殿様が「苦しゅうない。おもて（面）を上げよ。」

そこで仁助は、畳のおもてにてをかけて引き上げようと力む。庄屋があわてて声を落とし、「おもては、畳じゃない。つら（面）のことじゃ。目鼻のついとるのがおもてじゃ。」

「ははあ、目鼻のついとる方がおもてで、ぼのくど（盆の窪）の方が裏でございますか。」仁助は澄まして顔を上げた。

やがて殿様が、「あいや、百姓仁助、ばくさく（麦作）はいかに。」と問われたが、「ばくさく」の意味が分からない。とっさに「はい、はい、ずいきのこうきでございます。」

今度は殿様の方で「ずいきのこうき」の意味が分からない。近侍の者に、静かに「瑞気の香気と言うようだが、どんな意味か？」と、おたずねになる。

家来たちも何のことか分からないので、仕方なく庄屋を差し招いて、こっそり、「ずいきのこうき」の訳を聞くと、庄屋も知らない。

庄屋はそっと仁助にたずねると、仁助は声を潜めて庄屋に「ばくさくとは何のことでございますか？」と反問する。庄屋が「麦の作柄はどうかという意味じゃよ。」と、耳打ちして教えると、「そうでございますか。ずいきのこうきとは、ひじょうに良いできればえと言うことで。」と答えた。

さすがの仁助。正に見事な対応ぶり。そして、殿様に答えは届いて、めでたくけりがついたという。

それから、いろいろな問答が交わされ、とんちの仁助も庄屋も面目を施して、褒美をいただき、殿様の御前を引き下がったが、このことから田浦では、「はい、はい、ずいきのこうきでございます。」が、やはり言葉として使われ始めたのである。